漢史には夙く漢代から西域地方の史實に關連して賈客とか商胡とかいふ文字が屢々見ゐて居る、今記臆して居る所で古い時代のものは、後漢書班超傳に超が焉耆を攻めた時に、龜茲于闐等の兵と外に賈客千四百人を發したことが記されて居る如きである、この文字丈けに依つては此等の商人が何れの國人であるかは固より知り得べきでないが、併しソグド地方には古くより商業を以て生業としたものが多く住んで居たもので、彼のサルトなる民族の名稱も實に商人の意に外ならぬと思はれるのであるから（東洋學報第五卷第三九七頁拙稿回鶻文法華經普門品の斷片注(1)參照）、此等の賈客といふものゝ中には必らずソグド地方商人を指して居る場合が甚だ多いことゝ思ふ、スタイン氏が羅布泊（ロブノル）より敦煌に通ずる古道の衞堡の廢墟から見出したソグド語の文書は、ゴーチオ氏の研究によれば紀元一世紀に作られたものと認めらるるのであるが、七世紀八世紀時代に彼等の作製した文書もまた此の地方から發見せられて居る（藝文大正元年第八號第十四頁—第十五頁參照）、勿論彼等の商業上の目的地の重なるものは支那であつたから、その交通の間には文化の上に於ても種々の影響を之に及ぼして居るべきこと想像に餘りある、しかし今は此の問題に入つて自說を述ぶべきではない。

六　回鶻文化の東漸

支那領トルキスタン地方に回教の行はるゝに至つたのは、カラ汗家或はイレク汗家と稱し、多くの學者がウイグル種と認め、少數の人はカルルック種と認むる王朝の勢力に據るので、此の家の可汗の一人が、九六〇年頃に初めてその部下を率ゐて回教に歸依したものだといはれて居る、此のカラ汗家の都は初めは今の露領セミレチエンスク